中年期以降の国際結婚移住に見る適応プロセス

―国際移動を二回経験した国際結婚移住女性の事例を通して―

南　　紅　玉*

近年農村地域の国際結婚の構造が変化しつつあり，多様な背景やニーズを持った国際結婚移住女性が存在していることがわかった。例えば，初婚で来日する人もいれば，再婚して子連れで来日する人もいる。また，結婚適齢期をはるかに超えている中高年層の国際結婚移住女性の存在や，韓国国籍を持つ中国朝鮮族のような2度の国際移動をしている人もいる。今後ますます国際化が広がっていき，外国人や「移民」が増加していく中，より多面的な視点から国際結婚した移住女性の研究をすることは重要な意味をもつ。

本稿では，韓国国籍を持つ元中国朝鮮族の国際結婚移住女性を対象に，彼女たちの国際結婚の経緯と定住プロセスを明らかにすることを目的とする。そして，従来の「国際結婚急増期」に来日した国際結婚移住女性たちの定住とどのような相違点があるかについて検討する。

キーワード：国際結婚移住女性，中年期以降の移住，中国朝鮮族，エスニック・コミュニティ

はじめに

日本における国際結婚は，1980年代後半の「農村の国際結婚」を代表とする「国際結婚急増期」の研究をもとに，農村社会の「嫁不足」の社会問題から「集団お見合い婚」の問題点などが論じられてきた。また「グローバルな経済格差や家父長制」を時代的背景とする「ムラの国際結婚家庭」のあり方などについての議論が展開されてきた。近年では，女性自身に焦点を当て，国際移動する女性の異文化適応，ジェンダー，民族・エスニシティ，主体性などの側面についての研究が増えている。

結婚は夫と妻となる2人がそれぞれの過去に展開してきた社会関係を一つの家族ネットワークと再編するものである。しかし，国際結婚移住女性は，一方的に夫のネットワークに組み込まれ，母国で形成した社会資源が利用できず，夫側の家族や社会または文化への適応を一方的に押し付けられることが問題であると指摘されることもある。国際結婚を目的とし国際移動をしている女性たちには，日本国内だけに限らず海外においても，ジェンダーや異文化への適応など重層的な困難に直面しかねないことは明白な事実である。「移民の女性化」が進む今日の国際的情勢のなか，近年の日本国内の国際結婚に関する研究でも国際結婚した女性を結婚移民として位置づけ，議論する傾向が

*教育学研究科　助教

みられるようになった。

武田（2011）は，一般にある国際結婚した女性のステレオタイプとして，女性たちの被抑圧的な状況を強調した封建的な農村の家族や社会の中で一方的に同化を迫られている「かわいそうな女性」というものと，「手段的結婚」をする「ずるがしこい女性」というものをあげ，これらは彼女たちのエージェンシー，すなわち機能や媒介する能力をもつ存在を過小評価することになると指摘している。「移住女性を「単純な構造的犠牲者」とみなすのではなく，個別的な意識や言説を通じて「主体」に注目することである。」（柳蓮淑2013 p.38）近年，地域社会で就労や起業など経済的な自立を実現した国際結婚移住女性の事例が多数報告される中，日本社会で家族を形成し地域社会の構成員として主体的に定住していく過程の女性たちの課題をより具体的に議論する必要がある。

筆者はこれまで，様々な切り口で国際結婚を理由に日本へ移住した，外国人女性の定住プロセスについて実証的な研究をしてきた。その中でも主に農村地域で定住している，国際結婚移住女性の社会参加と学習に焦点を当てた。それにより，長年日本に定住している国際結婚移住女性たちは，定住生活を果たすために，来日初期段階の異文化適応だけではなく，定住の深化に伴い広がる生活世界に順応していくための学習を，インフォーマルな形で行っていることがわかった。この学習形態は，彼女たちが生活の場である家庭や地域社会，さらには仕事の場への参加の過程で見られるものであった。このような社会への参加を可能にするには，個人の強い自立性や主体性の発揮が前提条件となるが，それ以上に学習環境，すなわちコミュニティへの参加が重要である。

その中でも農村に定住している国際結婚移住女性たちの適応過程を学習の観点から見ると，以下のことが重要であることがわかった。①来日直後の日本語学習を中心とした学習。②村落・地域社会の風俗・習慣への適応。③仕事に伴う技能習得，同僚との交流，職場文化への理解。そして④それらを通して初期の定着意志を強めていくことである（南2017，p.106）。

しかし，以上のような分析は適応がうまくいっている事例から得た研究成果であり，国際結婚移住女性すべての個人に当てはまることではない。今までの研究は主に「農村の国際結婚急増期」に来日した女性を対象にしてきたこと，また定住意識が比較的強く日本の家庭や地域社会へ積極的に参加しようとする事例を中心に分析を行った結果であると見ることもできる。

ところが，継続的なフィールド調査を通して，近年農村地域の国際結婚の構造が変化しつつあり，多様な背景やニーズを持った国際結婚移住女性が存在していることがわかった。例えば，初婚で来日する人もいれば，再婚して子連れで来日する人もいる。また，結婚適齢期をはるかに超えている中高年層の国際結婚移住女性の存在や，韓国国籍を持つ中国朝鮮族のような2回の国際移動をしている人もいることがわかった。今後ますます国際化が広がっていき，外国人や「移民」が増加していく中，より多面的な視点から国際結婚移住女性の研究をすることは重要な意味をもつ。そのためには，国際結婚移住女性が生活している地域社会のより具体的な状況を踏まえ，彼女たちの生活実態との関係を考慮し，適応の実態をより質的に見ていく必要がある。例えば，国際結婚移住女性をタイプ分けし，来日経緯が異なる人や国籍・地域別，民族別に，日本への移住や定住プロセスについて具体的に検討をすることで，より多面的な視点から多様化する国際結婚移住女性の実態を明らかに

していくことができるだろう。

本稿では，多様化している「農村の国際結婚」の実態を明らかにするため，中国から韓国へ，さらに韓国から日本へと2回の国際移住を経験した3人の国際結婚移住女性の事例をとりあげる。その際，2回の国際移住の経緯や中年期以降に決めた日本人との国際結婚の経緯を分析することを通して，中年期以降の国際結婚移住女性の現状および来日後の適応状況について明らかにする。それを踏まえたうえで，中年期以降に来日した国際結婚移住女性の定住意識や定住過程における課題について考察を加える。

1　調査方法と調査協力者の概要

⑴調査と分析の方法

本研究では，方法としてフィールド調査とインタビュー調査，質的分析方を用いる。フィールド調査では，まず国際結婚移住女性が生活している地域に定期的に訪問し，参与観察を通して実際の生活状況を把握した。そして，半構造的な調査項目をもとに個人へのインタビュー調査を行った。調査の基本的な姿勢としては，現地に何回か訪問し，調査協力者と継続的に関ることで，信頼関係を築きながらフィールド調査を行うことである。インタビューを行う際には，出来事やその時の認識，考えをできるだけ具体的に聞き取ること，および語り手の気持ちや感じたことも含めた，より深層的なデータの収集を試みた。

⑵調査協力者の選定

筆者は，2010年から福島県で継続的なフィールド調査を行ってきた。その中で，知り合った国際結婚移住女性たちの紹介を通じ，フィールドを広めていきながら，多くの協力者と出会うことができた。さらには国際結婚移住女性たちで形成されたコミュニティと接触することができた。このような調査を通して，2000年以降来日した国際結婚移住女性のうち，主に韓国国籍の国際結婚移住女性を中心に，来日時の年齢層が比較的高い人がいることに気づいた。そして，さらには韓国国籍を持つ元「中国朝鮮族」の女性のような2回の国際移動の経験を持つ人の存在を知り，長年調査に協力してくれた方を通じて何人かを紹介してもらい，調査の依頼をした。そのうち，今回の調査協力者の3名については，2016年から現地で関わりを持ち，信頼関係を築いており，2018年2月にインタビュー調査に応じてくれたケースである。

⑶調査協力者の概要

表1は，調査協力者の概況を示したものである。3人の調査協力者は韓国国籍を持っているが，元の出身は「中国朝鮮族」である。彼女たちは，一度中国から韓国へ移住し，そこで韓国国籍を取得している。その後，再び韓国から日本へ移住した。来日の理由は，日本人男性との国際結婚である。3人とも2010年に来日しており，当時の年齢は40代から50代と中年期以降である。3人のうち，2人は国際結婚で日本に来てから一度離婚をし，その後日本で2度目の結婚をしている。夫との年齢差

は20歳以上離れている人もいれば，同年代や10歳前後の人もいることで特に共通する点はない。国際結婚の経緯は，日本在住の国際結婚移住女性の知人の紹介がきっかけで，お見合い結婚をしている。来日後も紹介者の知人を通じ国際結婚移住女性たちのネットワークと密接な関わりを持っている。彼女たちは，国際結婚後の生活のなか経済面では夫に頼るのではなく，来日直後から仕事を始め経済的な自立を図っている。日本語について，3人ともインタビューを行った当時，来日してから8年くらい経っているにもかかわらず，日本語能力が上達していない。日本語の学習機会や学習環境が整っていないことから，日本語能力の向上が難しいことが考えられる。本人たちは言葉の壁で不便さを感じるものの日本語ができなくても今の生活に特に支障がないと考えている。家族構成は，3人とも再婚であり，夫婦ふたり暮らしをしている。夫婦間には子どもがいなく，夫婦それぞれに成人した子どもがいる。日本における親族や近隣とのつながりは日本で子どもを産み育てている国際結婚移住女性と比べうすい傾向にあり，同国人ネットワークとのつながりが強いことがわかった。

表1　調査協力者の概況

	A18	B18	C18
国籍 民族	韓国 （元中国朝鮮族）	韓国 （元中国朝鮮族）	韓国 （元中国朝鮮族）
韓国移住年次	1996年	2000年前後	1996年
韓国移住年齢 韓国居住年数	42歳 13年	30代前後 10年	20代後半 20年前後
来日年次	2010	2010	2010
来日時年齢 在日年数	50代半ば 8年	40代前半 8年	40代後半 8年
夫の年齢	50代後半 70代前半（再々婚）	60代後半	50代前半 50代半ば（再々婚）
結婚経歴	再婚 四年後再々婚	再婚	再婚 三年後再々婚
結婚の経緯	知人の紹介	知人の紹介	知人の紹介
在留資格	3年間配偶者ビザ	永住	特別定住
来日後職業	韓国料理店経営	主婦（パート）	整体院経営
日本語能力	片言	日常会話レベル	日常会話レベル
日本語学習	生活の中	地域の日本語教室	生活の中

⑷トランスナショナリズムと「移動の文化」

今回の調査協力者は，二回の国際移動経験を持つ「中国朝鮮族」である。事例分析に入る前，まず「中国朝鮮族」の民族的背景と「移動」の歴史について，先行研究を通して把握していく。

朝鮮族とは，1949年以降中国で少数民族政策が実施される過程において，中国東北部に居住する朝鮮人に与えられた少数民族としての名称である。中国の国勢調査（2000年）の統計によれば，朝鮮族の総数は192万3842人で，中国東北部の吉林省，黒竜江省，遼寧省の三つの地域に約90％以上が

集住している。朝鮮族の移動は，「激動の東北アジア近代史」と深い関係が見られ，17世紀末ごろに始まり，19世紀に至り急増と言われている。近年では中国の改革開放政策後，特に1990年代以降のグローバル化の進展とともに「朝鮮族の再移動」が日本，韓国，ロシアなどへの国際移動として展開されている。今回の3人の調査協力者たちは，まさに1990年代の中国国内で起きている「出国熱」が盛んな時期に，一度目の国際移動を選択した人たちである。

中国朝鮮族の「移動」に注目した先行研究は主に韓国の研究者によるものが多い。日本における先行研究で，権（2011）は朝鮮族の移動性を「移動の文化」として捉え，1990年代半ば以降，グローバル化に連動して「トランスナショナリズム論」に位置づけている。トランスナショナリズムについて，上杉（2011）による再定義を見ると，「複数の国の国境を越え，長期間継続して頻繁に見られる，移民の多元的帰属ないし多元的ネットワークをめぐる諸現象」とされている。権（2011）は，朝鮮族の人たちが日本への越境を可能にした背景について以下のように指摘している。

まず，中国の改革開放以降の1980年代半ばから中国の一般の人々が自由に海外に行けるようになった。さらに，朝鮮族が来日する際，エスニック・ネットワークの存在が大きな役割を果たしている。そして，最も近くて安く行ける先進国として日本が選ばれやすい。しかし，日本への移動は言語などの文化的資本の制限があるため，朝鮮族の多くは同じ言語や文化的背景を持つ韓国への移動を優先的に選択する傾向があるとしている。

以上のような中国朝鮮族の国際移動の社会的背景を踏まえ，次では，今回の調査協力者たちの事例を見ていく。

2　事例分析

⑴事例1

A18さんが中国から韓国に移住した時期はまさに上述した朝鮮族の人が韓国に大量移動していた時期であった。彼女は中国国内で安定した仕事があったにもかかわらず，42歳の時退職をし，親戚訪問の形で韓国に渡った。母子家庭で一人息子の養育費を稼ぐことが目的だという。当時の中国では，女性一人では，安定した仕事があったとしても経済的・生活的保障がえられない社会的状況であったことが窺える。

親族ネットワークを利用し韓国に渡ってから，6ヶ月経ったところで韓国国籍を取得した。韓国での生活は，中国にいる息子のために仕送りをするという明確な目標があった。そのため，住み込みで長時間従事できる仕事を選択した。仕事の内容は，清掃や家政婦業などであった。韓国からの仕送りで，息子を大学に行かせたこと，結婚させ中国に家を買ってあげたこと。彼女にとってこれらのことを成し遂げたことは人生で一番の成果だと言っている。

来日した理由については，年齢とともに体力的な仕事ができなくなっていることや韓国では安定した住居や生活環境がなく生き苦しさを感じていたところ，日本にいる知人に呼び寄せられ来日したと言っている。知人は日本にいる国際結婚移住女性で，来日後その人が経営する韓国料理店で働き始めた。一回目の国際結婚は，相手の条件など考えず在留資格の取得を優先的に考えていた。し

かし相手の経済条件や生活能力などの問題で，4年後に離婚した。国際結婚していた4年間，彼女は長時間店で働いており，家庭にいる時間が短かったという。そのため，日本の家族生活への適応や，家族を中心とした近隣・地域社会への参加過程はみられなかった。その代わり，同国人ネットワークに頼った生活をしていたことが明らかになった。離婚した半年後，70代の日本人男性と再再婚をした。働く店で知り合った人で，経済面や生活面での援助をもらうこともできたという。また，夫を通して日本人とのつながりを持つこともできた。しかし，日本語がなかなか上達しないことが問題で，依然として同国人ネットワークに依存しながら生活をしている。

表2　A18の事例紹介（インタビュー内容に基づき作成）

中国での生活状況	家族状況	息子と母親
	婚姻関係	一度結婚し，離婚（夫の悪い酒癖が理由）
	職業	国営企業で正職員
	経済状況	母子家庭のため不安定
	社会環境	①安定した職業はあるが裕福ではない ②息子の教育費など不安がある ③その時期外国に出稼ぎに行く人が多い
	人生目標	息子のために経済状況の改善
韓国への移動の条件（1996年，42歳） ①出国熱の社会風潮　②経済的豊かさを求め　③親族ネットワークの利用		
韓国での生活状況	家族状況	①一人暮らし ②中国に母親，息子は兄弟が面倒 ③母方の兄弟が韓国
	婚姻関係	なし
	職業	①ホテルの住み込みで清掃業（10年） ②住み込みの家政婦
	経済状況	①収入のほとんどを仕送り ②中国で家を購入 ③息子の教育費，結婚費用
	生活環境	①住み込みの仕事をしているため，住居はない ②長時間労働をしていた ③年齢や体力の制限で仕事が不安定 ④生活が不安
	人生目標	①息子のために仕送りできること，息子が就職，結婚したので達成 ②年取ったら安定した生活がしたい
本への移動の条件（2010年，55歳） ①子どもの成人と自立　②年齢や体力で就労が困難　③生活が不安定　④同郷ネットワークの存在		
日本での生活状況	婚姻関係	①1度目の結婚：・結婚目的で来日したため，結婚相手の条件を見ずに結婚 ・結婚4年目ビザ取得が困難なため離婚 ②2度目の結婚：仕事場で出会った男性と再婚
	家族状況	①1度目の結婚：夫と二人暮らし，夫に子供なし，親族付き合いなし ②2度目の結婚：夫と二人暮らし，夫に娘一人，親族付き合いなし
	経済状況	①1度目の結婚：・来日直後から知人の店で料理を作る仕事 ・夫の職業が不安定なため，夫からの経済的援助なし ・生活保障なし ②2度目の結婚：・韓国料理店を経営 ・経営の初期資金を夫からの支援 ・夫の経済的状況が安定しているため，特に不安がない

	生活環境	①1度目の結婚：・仕事場と住むとこが離れているため，週一回家に帰る ・夫婦間の関係，生活条件に不満 ・配偶者ビザが1年一更新で，身分保障がなく不安 ②2度目の結婚：・仕事場と住むとこが近いため，両立できる ・夫婦間の関係良好，生活条件に満足 ・3年間のビザ取得でき安心
	社会関係	①1度目の結婚：・近所付き合いなし，親族付き合いなし，地域付き合いなし ・夫を通した日本人との付き合い ・同国人ネットワーク，仕事場での人付き合い ・無尽講（たのもし講）を通した地域住民との付き合い ・国際結婚移住女性のコミュニティ ・SNS 機能を利用した母国との関係維持 ②2度目の結婚：・近所付き合いなし，親族付き合いなし，地域付き合いなし ・同国人ネットワーク，仕事場での人付き合い ・国際結婚移住女性のネットワーク ・SNS 機能を利用した母国との関係維持
	適応状況	①1度目の結婚：・日本語が全く話せなく，日本人とのつながりほとんど無い ・家庭生活が不安定 ・同国人ネットワークに依存 ②2度目の結婚：・片言の日本語，夫や店のお客さんを通して日本人と繋がり ・家庭生活が安定，安心して暮らしている ・同国人ネットワークに依存
	老後対策	日本でずっと暮らしたい。子供に迷惑をかけない。老人ホームを考えている

⑵事例２

B18さんの場合，日本での生活に満足しており，インタビューでは中国と韓国での生活について詳しく語らなかった。彼女も A18さんと同じように離婚を経験し，息子の養育費のため韓国から仕送りをしていた。中国での一回目の結婚では夫婦関係に問題が多かったが子どもが成人するまで婚姻関係を維持していた。子供が成人したことをきっかけに来日し，日本にいる知人を通じ今の夫を紹介してもらったという。一年くらいの付き合いを経て，年齢差が20歳もあったが，夫の優しく誠実な人柄に惹かれ結婚したという。

結婚生活については，夫の経済力や生活能力などに満足しており，日本語や生活習慣についても夫が丁寧に教えたため，同時期に来ている国際結婚移住女性より上達が早かったという。また，近隣や同じ地域にいる親族との関係も良好であり，夫を通して地域社会の行事などにも参加している。二人の間に子どもはいないが，夫側の子どもたちと定期的に会っている。また，年に何回か夫婦で海外に旅行に行くなど，本人は夫婦関係が良好であると感じている。

同国人のネットワークとのつながりも強く，そのつながりがあるから日本での生活が寂しくないといっている。夫からは老後に一人でも暮らしていけるように，仕事などを通して日本人とのつながりをもつことや，日本社会で生きていくことを学ぶことなど，いまから準備するよう言われているという。そのため，彼女は現在パートタイムで日本人と一緒に働きながら毎日学んでいるという。

表3　B18の事例紹介（インタビュー内容に基づき作成 ）

中国での生活状況	家族状況	夫，息子一人
	婚姻関係	・23歳の時結婚 ・半分以上別居生活 ・夫婦関係悪い ・子供が成人するまで我慢
	経済状況	夫の仕送り
	生活環境	夫が韓国に出稼ぎに，半分くらいは息子と二人暮らし
	人生目標	子育てが最優先
韓国への移動条件（2000年前後，30歳前半） ①夫が韓国にいる　②親族ネットワークの利用　③こどもが大学入学		
韓国での生活状況	家族状況	夫と二人暮らし，親や兄弟（離婚してから7年くらい一人暮らし）
	婚姻関係	夫婦関係悪化，離婚
	職業	不安定な仕事
	経済状況	夫からの援助なし，離婚するため慰謝料払った 子どもの教育費の仕送りで精一杯
	生活環境	親を含む親族友人が周りにいるが，生活環境安定していない 韓国での生活は厳しく，辛い経験をたくさんした
	人生目標	失敗した結婚生活苦労をしていたため，安定的な生活を望む
日本への移動条件（2010年，42歳） ①子どもが成人し，自立　②韓国から短期ビザで来日　③同国人ネットワークの存在		
日本での生活状況	婚姻関係	結婚経緯：・日本在住の知人のところに遊び目的で来日，夫と知り合う（20歳年上） ・夫と何回かデート，韓国の家族にも紹介（信頼できる人と判断） ・出会ってから約1年後，韓国で入籍し，来日 ・夫への信頼感が高く，夫婦関係良好
	家族状況	夫と二人暮らし，夫に成人した子供が3人（時々会う），近所の親族と付き合いあり
	経済状況	・夫の経済状況が良好のため，特に経済的な不便なし ・来日直後から3年間縫製工場で就労 ・1年後近所のスーパーでパート ・老後資金を準備している
	生活環境	・安定した家庭環境で安心した生活 ・夫が言葉から生活に必要なことすべてを教える ・仕事も比較的に安定しており，周辺との人間関係も良好 ・年に何回か夫と海外旅行に行く ・母国の家族とも常にSNSなどで連絡が取れるから寂しくない
	社会関係	・近隣との関係良好，夫の家族の関係も良好，夫を通した地域付き合いあり ・同国人ネットワーク，仕事場での人付き合い ・国際結婚移住女性のコミュニティ ・SNS機能を利用した母国との関係維持
	適応状況	・夫の協力を常に得ているため，適応が早い ・日本語も日常生活に支障ない ・職場の日本人との人間関係にも慣れている ・仕事を通して日本社会を知り，適応することが大事だと思う
	老後対策	・日本でずっと暮らしい ・いざとなった時，夫婦お互い介護する約束をしている ・夫が先に亡くなっても自立できるように今から準備 ・老後資金を貯める ・同国人コミュティの存在で安心

3）事例3

C18さんの場合も，1990年代韓国人との国際結婚で韓国に渡った事例である。当時，日本人との国際結婚も考えていたが，言葉が通じる韓国の方が生活しやすいと考え韓国を選んだ。しかし，彼女の韓国での結婚生活は韓国に渡った直後夫側の都合により破綻した。その後は，再婚などを考えず中国にいる子どもへの仕送りのため，収入の多い職種を選び長年仕事中心の生活をしていた。子供が成人し，韓国に呼び寄せ一緒に暮らしたかったが，長い間離れて生活していた親子関係はうまくいかなかったという。それが韓国を離れる原因の一つである。

来日前，彼女はカナダなど他の国への移住を考えていた。日本への移住を決めたのは，日本に知人が居ることと，旅行で来日したときの日本の生活環境などへの好印象があったからだという。

彼女の場合，日本にきてから二回の結婚経験をしているが，二回とも夫を病気で亡くし，現在一人暮しをしている。最初の国際結婚は，実家である夫の経済条件や生活能力，家庭状況などに満足できず，韓国にいた時と同じように働き経済的に自立しようとした。韓国人ネットワークを通し他県に行き，住み込みの出稼ぎ生活をしていた時期もあったという。経済的自立は彼女にとっては最も重要なことであった。現在は，自分で整体のお店を経営しながら生活をしており，経済的な困難はないという。しかし，夫を病気で亡くしたあと，在留資格の問題に直面していた。現在は，特別定住の在留資格で日本に残っているが，今後の生活に不安を感じている。彼女はできれば日本でずっと暮らしていきたいと考えている。

表4　C18の事例紹介（インタビュー内容に基づき作成）

中国での生活状況	家族状況	息子と母親（息子が9歳の時韓国へ）
	婚姻関係	一度結婚し，子供が一歳の時離婚
	職業	定職がなく，大都市で出稼ぎ
	経済状況	不安定
	社会環境	①母子家庭で生活状況が厳しい ②生活保障がなく，子育てへの不安が大きい ③周囲に国際結婚で韓国や日本に行く人が多い
	人生目標	息子のために経済状況の改善
韓国への移動の条件（1996年，20代半ば） ①出国熱の社会風潮　②経済的豊かさを求め　③友人の紹介（国際結婚女性）		
韓国での生活状況	家族状況	①一人暮らし（結婚してすぐ破綻したため） ②中国にいる息子の親権を元夫に取られるたが，養育費を全部負担 ③息子が成人後，韓国に呼び寄せた（関係が悪，同居が難しい）
	婚姻関係	結婚して韓国へ，韓国に行ってから夫の事情で1年後離婚
	職業	①飲食店，あかすり，マッサージなどの仕事 ②建築現場で，塗装などの体力仕事（16年間）
	経済状況	①収入のほとんどを息子のために仕送り ②中国で家を購入したが元夫に売られ，借金を返すハメになる ③自身のために使えるのは最低限の生活費のみ

	生活環境	①結婚後のトラブルとつらい体験で，再婚を考えられない，一人で生きていく ②住み込みの仕事をし，最低限の生活を長年していた ③長時間労働，男性と同じ体力労働で厳しい生活，体力的にも精神的にも厳しい ④息子を呼び寄せたが，ずっと離れていたため，一緒に暮らすのが難しい ⑤韓国に外国人が増え，他の国に行く準備をしていた（カナダ，アメリカ，日本）
	人生目標	①息子のために仕送りすること，お金を少しでも多く稼ぐこと ②少し安定した生活がしたい
日本への移動条件（2010年，40代半ば） ①子供が成人し，自立　②旅行で来日経験　③韓国から離れたい願望　④知人の紹介		
日本での生活状況	婚姻関係	①1度目の結婚：・結婚目的で来日し，知人の紹介で結婚 ・相手は7歳上，以前2度韓国人女性と結婚暦あり（結婚後に知った事実） ・結婚2年9ヶ月で夫が病気で，死別 ・結婚3年未満であるため，ビザの更新ができないが，姑の介護やその前の定住意識が認められ，特例で定住ビザ取得 ②2度目の結婚：・夫の弟と再婚（姑の介護のため） ・結婚に対して失望が大きく，そのままの生活を維持するため選択 ・結婚一年後，夫が病気で，死別
	家族状況	①1度目の結婚：夫，姑と同居（夫の子供とはあったこともない） ②2度目の結婚：夫とふたり暮らし，姑介護施設
	経済状況	①1度目の結婚：・夫の経済状況が悪く，夫からの経済的援助全くなし ・自分で頑張らないと生活が厳しい ②2度目の結婚：・夫が無職のため，経済的に頼ることができない ・最低限の投資で店を借り，自力で内装など環境改善 ・夫が亡くなってからも自力で生活
	生活環境	①1度目の結婚：・夫の経済状況が悪く，生活能力も低かったため，頼れない ・夫婦間の関係がうまくいかず，生活条件に不満が大きい ・姑との関係はよく，結婚生活を続ける勇気をもらった ・住居を自分でリフォームし，生活環境を変える努力をした ・夫からの経済的援助が全くないため，経済的に自立するしかない ・結婚一年後，他県にいる同国人の紹介で住み込み出稼ぎに出た ②2度目の結婚：・マッサージ店を経営し，生活は比較的に安定 ・夫婦間の関係良好，生活条件に満足 ・夫が亡くなってから健康状態が悪くなり，精神的な面も問題
	社会関係	①1度目の結婚：・近所付き合いあり，親族付き合いなし，地域付き合いなし ・日本語ができないため，日本人との付き合いが難しい ・同国人ネットワーク，仕事場での人付き合い ・国際結婚移住女性のコミュニティ ・SNS機能を利用した母国との関係維持 ②2度目の結婚：・近所付き合いなし，親族付き合いなし，地域付き合いなし ・同国人ネットワーク，仕事場での人付き合い ・国際結婚移住女性のネットワーク ・無尽講（たのもし講）を通した地域住民との付き合い ・SNS機能を利用した母国との関係維持
	適応状況	①1度目の結婚：・日本語が全く話せなく，日本人とのつながりほとんどない ・家庭生活に不満だが，定住の意思は強い ・日本社会とのつながりが弱く，同国人ネットワークに依存 ②2度目の結婚：・片言の日本語，店のお客さんである日本人と繋がり ・日本での定住願望は強いが，定住生活に強い不安を感じる ・同国人ネットワーク以外に頼るところがない
	老後対策	日本でずっと暮らしたい。先が不安でどうなるかわからない。健康に不安がある

3　考察

以上では，調査協力者3人のそれぞれの来日経緯と来日後の生活および適応状況について具体的

に見てきた。それを踏まえ，次に3人の来日前の生活状況や国際結婚移住を選択した背景などが来日後の生活や定住過程にどのような影響を与えているかについて考察を行っていく。

⑴生存戦略としての国際結婚移住

1980年代後半から始まった農村の国際結婚における，国際結婚移住女性について「手段的結婚」や「経済的利益のための上昇婚」であるといった指摘がしばしばあった。今回の事例は，まさに国際結婚を国際移動のための手段とした実例であるといえる。彼女たちにとっての国際結婚を通した日本移住は，生存戦略である。それは彼女たちが生きた時代背景と女性の低い社会地位が，ジェンダー化現象を起こしやすくする社会構造的要因が背景にあると考えられる。

今回とりあげた事例での一回目の国際移動，すなわち中国から韓国への移動の目的は，韓国での「出稼ぎ労働」を通して国内の家族の経済的状況の改善のためであった。そこには，離婚し母子家庭で子育てをする女性たちの本国での社会的・経済的に抑圧される低い社会地位が背景にある。1990年代中国社会で急速に広がったグローバル化は彼女たちにそのような窮状から脱出できる機会を与えたと考えられる。その当時の先進国への出稼ぎ労働や国際結婚を目的とした国際移動は，中国社会だけではなく，アジアの多くの国で見られる「移住する女性」に共通して見られる現象であった。しかし，本稿の事例では，上記の一回目の国際移住が必ずしも本人たちが望むような結果に至っていないことが明らかになった。次に，二回目の国際移動，韓国から日本への国際結婚移住の動機を見ると，韓国での長年の「出稼ぎ労働者」としての生活は，年齢と体力の制約があり，韓国国籍を持っているにもかかわらず社会的にも経済的にも低い地位にあり抑圧されている状況が概観できる。

事例で紹介した二回目の移動，韓国から日本への移住は，一回目の移動の最大の目標である子育ての終了で得られた「自由で」，再び目の前の経済的生活的困難から脱出することが一番の動機になっている。柳（2011）は，韓国人女性の日本への国際移動の「戦略としての多様の移住要因」として「文化的逃避／避難」の概念を提示し，経済的社会的困難や抑圧からの脱出や新しい主体の再構築を動機として女性の国際移動が生じると指摘した。

しかし，中年以降の国際結婚の場合，結婚相手の社会的地位が低く，経済的条件が高くない人や高齢者である可能性が高い。その場合，結婚は日本の在留資格を得るための手段として考える人もいる。なかには，日本人夫の経済状況が低いことで女性が夫を養うことになる場合や，日本人夫の経済的社会的地位が低いことが原因で在留資格の更新ができなく途中で日本を離れなければならないケースもある。日本の家族と強い関係性を結ぶことが難しい中年期以降来日した国際結婚移住女性にとって，日本での定住生活には多くの課題が残されている。

⑵結婚移住女性とエスニック・コミュニティ

調査協力者の3人の来日経緯で共通している点は，日本に定住している国際結婚移住女性による知人の呼び寄せであった。韓国国籍の場合，3ヶ月の短期滞在ビザで自由に来日することができる。それを利用し，日本の知人のところに「遊び」に来て，現地の日本人男性とお見合いをして国際結婚

をするケースがほとんどである。これは，近年の国際結婚仲介業者に代わり国際結婚移住女性のコミュニティを利用した新しい結婚仲介の形だと言える。中年期以降の女性が日本人男性と国際結婚が成立できるのは，このようなコミュニティの存在が決定的な条件であると言える。事例を通してもわかるように，彼女たちの来日後の生活はエスニック・コニュニティに依存していることが特徴的である。

若い時期に国際結婚で来日した女性たちは，日本の家族に入り，妻としてだけでなく子供が生まれた場合は母としての役割が求められる。その中で，夫側の経済的，社会的資源を利用することができ，日本での生活世界を広げていく。その際には，日本の家族や地域社会さらには，もっと広い範囲の日本社会へ溶け込んでいきながら定住を実現していく。特に，日本で子供が生まれた場合，子供を通して家族としての連帯感が強くなり，子供を通した地域コミュニティとの関わりも必要となる。

しかし，中年期以降に結婚移住した女性は，ほとんど夫と二人暮らしの場合が多く，子供を通した家族や地域社会との関わりが求められないと言える。それは農村社会の特有のしきたりの拘束を受けなくてもいいという反面，夫との関係以外に地域社会と関わりを持つ機会が少なくなることを意味する。地域社会への参加は日本語の上達や日本で生活するための様々な学習機会を与える。その学習機会を得られないことは定住に一定の影響を及ぼすと考えられる。

事例から，エスニック・コニュニティの存在がある程度日本での生活を支える役割を果たしていることが明らかになった。事例の A18と C18の場合は，同国人ネットワークへの依存度が非常に高い。しかし，農村社会のエスニック・コニュニティというのは移民が集住している大都会と異なり，国際結婚移住女性たちにより形成された小規模で，分散的なコミュニティに過ぎない。その関係性も脆弱であると考えられる。しかも，そのコミュニティを支えている大半の人が地域コミュニティを基盤として生活をしている国際結婚移住女性であるため，彼女たちが，どの程度継続的にエスニック・コニュニティに関わり，支えていけるかは不明である。

事例の A18の一回目の結婚と C18のようにエスニック・コニュニティへの依存度が高い人は，そのコミュニティから排除された場合，日本での生活全般が成立しなくなる危険性がある。事例 B18のように，夫からの支援を十分にもらっている場合は，安定した定住生活をすることができるが，夫との20歳の年齢差を考えた場合，夫からの支援が得られなくなった場合の対策をしておく必要があるだろう。

現在，農村地域に存在する国際結婚移住女性を中心としたエスニック・コミュニティがどのくらいの規模で，どのような役割を果たせるかについては，今後も注目していきたい。

⑶経済的自立に対する願望と自意識

事例の3人は来日直後から仕事をしていた。特に A18の場合は，短期ビザで来日している時から知人の店で働き始め，その後は自分で韓国料理店を経営することになった。C18も同様，夫の経済状況が良くないことがわかった時，自分で稼がないとならないと考え，同国人ネットワークを通し

て仕事を始めた。B18の場合は，夫の社会的経済的状況が良好な条件でも来日してから間もなく地元の縫製工場で仕事をしていた。

今回の3人の協力者は来日する前，子育てなどが終っており，「自国への仕送り」をする必要はなかった。しかし，彼女たちには，夫に頼らず経済的自立をしたいという強い意志がみられた。このような経済的自立への認識の形成は，彼女たちの来日前の生活と関連していると考えられる。

しかし，日本での就職は，日本語能力，日本で就職するための技能や資格などによる制約があるため，簡単に仕事に就くことは難しい。そのなか，彼女たちは自分たちの今までの経験を生かし，自営業や同国人ネットワークを通して，主体的に仕事を探している。職種は，主にエスニック料理店などの自営業や同国人が経営している店でのサービス業である。

経済的自立は，年齢や日本語能力などのハンディをもっている人にとっては厳しい現実がある。彼女たちにとって高齢化が進んでいくにつれ経済的自立はより大きな課題となるだろう。

⑷定住意識と社会保障制度の利用

上述してあるように，国際結婚移住女性の間には日本人男性との国際結婚を在留資格取得のための手段として考えている人もいる。特に中年期以降に来日した国際結婚移住女性たちは，結婚，離婚の経験を持っている人が多く，結婚生活自体に期待をしていないという人もいる。また，日本で子どもを産み子供や家族との強い関わりを持っている国際結婚移住女性と比べ，来日初期の定住意識は薄いと考えられる。

しかし，今回の調査では結婚生活がうまくいかない場合でも，長年の日本での生活を通して，日本での定住意識が強くなる傾向が見られた。それは，日本社会全体への信頼と暮らしやすさが理由であった。

日本への定住意識には，日本の社会保障制度の利用への期待も含まれている。事例で見た二回の国際移動の最大の理由は，移住前の国の生活保障が整っていないことであった。中国社会は，正職を持っていても母子世帯で生活するには厳しい社会環境である。一回目の移動で韓国社会に移住し，韓国国籍を取得していても，韓国では外国人出稼ぎ労働者と同じような生活環境にあった。中年期になって，日本や第三国，アメリカ・カナダ・日本への移住を考えたのも，社会保障制度が整っている安定した生活環境を求めるためであった。今回の調査協力者のような中年期以降来日した国際結婚移住者女性にとって，日本に定住するための条件は老後の生活を支える社会保障など安定した生活環境が獲得できるかどうかである。しかし，日本社会で定住し続けるためには，日本の地域社会に参加し，地域社会の一員として成長していく必要がある。エスニックコミュニティへの依存度の高い中年期以降来日した国際結婚移住女性の定住生活をいかにサポートしていくかは今後の課題である。

おわりに

本稿では，日本における国際結婚移住女性の多様性に注目し，異なる来日経緯や背景を持つ移住

女性の定住プロセスをより具体的に分析した。それにより，多様化していく国際結婚移住女性の実態を明らかにし，中年期以降来日した，韓国国籍を持つ元中国朝鮮族の国際結婚移住女性を対象に，彼女たちの国際結婚の経緯と定住プロセスについて分析してきた。

今回の調査協力者は，①40代～50代という結婚適齢期にすると高い年齢層であること，②中国から韓国，韓国から中国へと二回の国際移動経験を持っている。

このような背景を持っている国際結婚移住女性の来日経緯や日本での定住プロセスを分析した結果，下記のことが明らかになった。

第一に，中年期以降に国際結婚で来日した女性は，若い時期に来日し子どもを作り日本の家族と地域社会との関わりを通して定住を進化していく国際結婚移住女性と比べ，日本の家族や地域社会と強い関わりを持っていないことがわかった。そのため，日本で生活していくための日本語の上達が比較的に遅く，日本社会から孤立しやすいことが考えられる。

第二に，エスニックコミュニティへの依存度が非常に高いことがわかった。彼女たちが日本に来る条件は，日本にいる知人の紹介である。そして，来日直後から日本での生活方法を同国人ネットワークを通じて学んでいる。事例で取りあげた3人の協力者たちは日本語ができなくても，日本社会とつながりが薄くても生活できると考えている。農村部のエスニックコミュニティを形成している主なメンバーは国際結婚移住女性であるため，コミュニティの成熟度が低いと考えられる。このような限られたコミュニティに依存した生活は，彼女たちの定住生活に様々な問題が引き起こす可能性がある。

第三に，日本での定住意識は強いものの，日本の家庭や地域社会との関わりが弱いことから，今後高齢化し介護が必要になった場合，日本社会がどのように対応していくかが課題になるだろう。以上のことを踏まえ，今後はより多くの事例を分析することで国際結婚移住女性の定住プロセスをさらに多面的に分析していきたい。

【参考文献】

権　香淑　2011.『移動する朝鮮族―エスニック・マイノリティの自己統治』明石書店

工藤　正子　2008.『越境の人類学―在日パキスタン人ムスリム移民の妻たち』東京大学出版会

武田　里子　2011.『村の国際結婚再考―結婚移住女性と農村の社会変容』

柳　蓮淑　2013.『韓国人女性の国際移動とジェンダー―グローバル化時代を生き抜く戦略』明石書店

渡辺　秀樹・竹ノ下　弘久編著　2014.『越境する家族社会学』彩流社

南　紅玉　2017.「国際結婚した女性の職場への参加を通した学習と意識変容」『東北大学大学院教育学研究科 研究年報』第65集第2号

Adaptive Process in Middle Age International Marriage Migration：

A Case Study of International Marriage Immigrant Women Who Have Experienced International Migration Twice

NAN Hongyu
（Assistant Professor, Graduate School of Education）

The structure of transnational marriage in rural areas is changing in recent years, and it turns out that there exist female immigrants who have diverse backgrounds and needs. For instance, some came to Japan for their first marriage, some came with their children then remarried. Besides, women far beyond the marriageable age nobility and women like Chinese – Korean who experienced international movement twice also exist. As Japan's internationalization going deeper and larger, foreigners and immigrants will be increasing rapidly. Thus, it is important to conduct a research on women who experienced transnational marriage in multifaceted perspective.

Focus on women whose nationality is Korea but born as ethnic Koreans in China, and then immigrated in Japan through transnational marriage, this paper aims to clarify their marriage and settlement process. Furthermore, the differences between this and the process of immigrant women in the "transnational marriage surge" will be discussed.

Keywords：Female marriage immigrants, Migration of middle age, Ethnic Koreans in China, Ethnic community